

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-1484
施設名	宮前 花と緑の保育園
施設所在地	荒川区東尾久 8 - 4 5 - 2 4
法人名	社会福祉法人 三樹会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

保育目標として、生活の中でことばでの興味や関心を育て、豊かな情報、思考力、表現力の基礎を培うと掲げており、様々な感情を経験する一つの方法として絵本を活用している。

今回の活動では5歳児クラスが興味を持っている絵本を題材に、自分達で物語を作る活動を取り入れた。

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

自由遊びの際に数名の子どもが紙を半分に折り、ノートを作っていた。そこに絵を描いて絵本作りを始める。それをきっかけに他の子どもも作って見たいとの声上がり、表現をもっと自由にのびのびとさせてあげたいと思い、たくさんの絵本に触れられる環境、発表会の場を設けていった。

2. 活動スケジュール

- ①自分で考えた物語を絵本にする
- ②童話や昔話の読み聞かせを行い、物語の内容を共有する
- ③発表会に向けての取り組み、創作劇や段ボール制作
- ④舞台上で演じて楽しむ。保護者や他クラスの前で発表する。
- ⑤オリジナルの物語の世界を表現する。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

○絵本コーナーの環境を整える

棚、ソファ、テーブル、紙、色鉛筆、ボンド、絵本、絵具、筆、模造紙、ブルーシート、段ボール

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ①自分で考えた物語を絵本にする
- ②童話や昔話の読み聞かせを行い、物語の内容を共有する
- ③発表会に向けての取り組み、創作劇や段ボール制作
- ④舞台上で演じて楽しむ、保護者や他クラスの前で発表する
- ⑤オリジナルの物語の世界を表現する

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

- ①数名の園児が自由遊びの際にお絵描きで使用している白い紙を半分に降り、ノートのような形を作って遊んでいた。それをきっかけに他の子も作ってみたいとの声上がり、白紙の冊子と色鉛筆を自由に使用できるように環境を整えた。



白い紙を折り、セロテープでとめる友だちの姿を見て、「なに作っているの?」「わたしも作りたい!」と遊びが広がる様子があった。「もっとたくさんページが欲しいよね」というリクエストが聞こえ、10ページの冊子を用意すると、それぞれが算数の計算式を書く、絵を描く、絵本のように場面展開のある絵を描くなど自由帳のように楽しむ姿があった。

- ②絵本コーナーで自由に本を選んで読んだり、週1回の絵本の貸し出し日を設け、家庭でも親子で本に触れる取り組みを行った。またクラスで午睡前に絵本の読み聞かせの時間を欠かさず設け、日本の昔話・世界の童話などに興味を持てるようにした。



普段の生活で子ども達の関心が高いこと(恐竜や迷路、国旗、道路標識やマークなど)に関する絵本を絵本コーナーに用意したことで本への関心が低かった子も「これ借りてお家で読みたい」と興味を高める様子があった。

国旗への関心から世界の国々も詳しくなり、外国の童話を読む際は「どこの国のお話?」と子ども達からの質問が毎回上がっていた。

③様々な物語を絵本を通して知る機会を設け、発表会での劇でどんな演目をやりたいかの想像が膨らませた。

子ども達の発案で始まったダンボール遊びでは、電車やお家など自然とグループで分かれて作る様子があった。



ダンボール遊びで自然に分かれた1グループが、自動販売機を作り、お店の人とお客さんに分かれ買い物ごっこを楽しんでいた。すると一人の女児が3歳児クラスの発表会で演じた“ポンタの自動販売機”のお話を思い出し、劇遊びが展開された。

「私は〇〇役ね」「僕は〇〇がいい」など自分達で役柄を決め楽しむ姿があった。

上記をきっかけに、今年度の劇で使用する大道具をダンボールで作るアイデアが上がり、ダンボールを土台とし、折り紙でちぎり絵をして色付けをした。

④【舞台上演じて楽しむ、保護者や他クラスの前で発表する】

発表会の演目決めでは、子ども達が意見を出し合い決められるよう、ホワイトボードを用意し意見を書き出した。

劇の演目が決まった際には、子ども達からの要望でその物語の絵本を改めて読み聞かせをしたが、自分のやりたい役が出来るよう自分自身で考えられる時間を設けた。



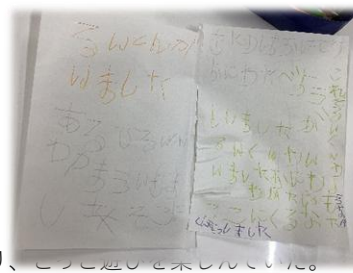
“ももたろう”の劇を行うことが決まり、自身でやりたい役柄を考え、パンダ役やネコ役、恐竜鬼などオリジナルの創作劇を考えた。

個々の「〇〇したい!」というイメージが広がり、“台詞はこう言いたい”、“手に〇〇を持ちたい”など子ども達のやりたい!が詰まった内容となり、友達と力を合わせることの大切さ、演じる楽しさを味わいながら発表を行えた。

⑤【オリジナルの物語の世界を表現する】

活動①で用意した冊子の「2冊目、3冊目が欲しい」という声があったのですぐ渡せるよう準備した。

「〇〇の〇って字はどう書くの?」と、平仮名を書こうとする姿が増えたり、クラスに4月から掲示されていた平仮名表を確認する様子が増えたりと、字への関心が高まる姿が増えた為、平仮名に関するワークを取り入れ1日2文字程度のペースで行った。



発表会後も、劇に関する話題が度々上がり、楽しく遊んでいた。

以前までは、絵が中心となった本を制作することを楽しむ様子があったが、発表会後からは字を書いたものが多くなった。又、内容も起承転結があったり、最終ページには“おわり”の文字があるもので、子ども達自身も「絵本作ったよ」という発言があった。

5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

- ①毎日の遊びの中で子どもたちが主体的に楽しむ姿からテーマを決めるキッカケが見つかった。何気ない日常のワンシーンから興味・関心を見出し、発展させる環境作りを行えた。
 - ②クラスの活動の中で本に触れる機会を作ったことで読むことの楽しさを感じる様子があった。友達に「これ一緒に読もう」と声をかけ、一緒に楽しむ様子もあったので個々の興味を高める本を都度用意した。
 - ③子ども達からの「やりたい!」という声を取り入れ行ったダンボール遊びが、発表会の劇の大道具作りに発展することが出来た。
 - ④演じる役や台詞を自分自身で考えたことで覚えることがとてもスムーズで無理なく練習を進められた。「〇〇を付けたい」「〇〇を持ちたい」など小道具に対するアイディアもあったため、必要な材料を用意し制作に取り組めることが出来た。
 - ⑤多くの絵本に興味・関心が高まり、自分から「これをやりたい」と積極的に発言が出来るようになった。発表することへの期待を持ち、話し合いをすることへの楽しさを感じられた様子があり、友達の考えにも耳を傾けられるようになった。
- 子どもが想像する絵本の世界を自由に表現する機会が出来、より興味や関心を引き出すことが出来た。

【活動を通して】

自分の興味・知っていること・理解していること・思いを伝える

周りの人の意見や考えを聞く

思いを伝え合う、一緒に考える、人の思いを受け止める

思いや考えが変化し、やがて深化する・何かの課題の解決方法を見つけるというプロセスの中で新しい知識や考えを取り込み、自分なりの思いや考えを人に伝える力や自分の感情や思いを調整する力が育ったように思う。保育者も子どもの発言から子どもの考えや理解を知ることができた。

活動後は普段の保育も指示ではなく「どうする?」と子どもたちの意見を聞くようになった。その結果、子ども達も自分の考えを言うようになり、他児の意見にも耳を傾けるようになってきたと思う。保育者が今まで以上に子どもと共に楽しみ、共感し、わくわくしながら接するようになったと感じた。